

## 〈随想〉

# 田中重太郎先生の思い出

池田 勇

わたくしは昭和五十九年四月から相愛女子短期大学の教員にさせていただきました。六十年度の推薦入試の一般高  
校生の面接に、入学志望の動機を尋ねていたところ、「短大の国文科希望なら、相愛へ行きなさい。相愛には偉い先生  
がおられるから。」と高校の先生がいわれたのでという答がわたくしの担当した受験生中に二名いました。

田中先生は相愛大学に行かれ、相愛女子短期大学には非常勤講師でしたが、やはり短期大学にもなくてはならない  
先生だと思いました。

わたくしが短期大学の教員にさせて頂いたとき、田中先生は、いつものおやさしい様子とは打って変わられ、厳  
しいおことばで、いろいろご注意をおっしゃいました。その一つを申し上げますと、

「学生一人一人の立場になってあなたかく接してもらいたい。学生にむかって、こんなことがわからないのかとい  
う表情を見せるようでは教員として失格である。」とおっしゃいました。

田中先生のお名前を初めて存じ上げたのは、昭和十八年の秋ごろ、京都新聞の記事に『枕草子の精神と釈義』とい  
う本が旺文社から出版された。著者は京都二商出身で、最年少で高検に合格した方とありました。当時わたくしは、京  
都二商の近くの京都一商の夜学生でした。ことし九十一歳になる岳父は、昭和十年代の初めころ、立命館に田中重太  
郎という先生がおられたことは覚えていたとのことですので、当時の中学校の教員の間では公私立や専攻科目に関係

なく、先生の存在は評判であつたようです。立命館中学校、商業学校出身の方にききますと、生徒間では、田中先生のことを「田重さん」「田重さん」「重さん」「天才先生」などと呼んでいたそうです。

あこがれの田中先生の枕草子の授業を受けましたのは、昭和二十一年立命館専門学校国漢科（二部）の二年生ときでした。——田中先生は立命館大学の予科教授でおられました。——当時テキストなどありませんでしたが、先生はどこからザラ紙を入手されたのか、ガリ版で小冊子を作つてくれました。そのころ学生が古本で購入したのは、春曙抄本系統のものが多かったので、三巻本で授業なさりたいお気持から苦労なされたことと思います。長身で瘦軀で端正な先生の「春はあけぼの……」「月のいと明きに……」など、元気なお声が今でも聞えてまいります。

田中先生のお弟子にさせていたのは、昭和二十四年のもう一学期も終りに近づいていたころでした。先生のお最初のお弟子さんの岡本博文氏——岡本博文氏は昭和二十三年の夏、田中先生の講演を聞き、感激し、弟子入りお願いの手紙を送られ、先生が鳥戸野陵（定子皇后陵）におまいりのとき、鳥戸野陵付近でお逢いになったそうです。そのときお二人ともまるで恋人とでも逢うように胸をわくわくさせていたとのことでした。——の妹さんがわたくしの勤務校の生徒でしたので、おことづけで「一緒に勉強してゆきましよう。家へ来なさい。」とのおことばをいただきました。感激いたしました。柿谷雄三氏もほとんど同時でした。二人とも「枕草子の精神と釋義」や「書と国文学講座」などが御縁でありました。先生は四人の集まりを四人とも商業学校の出身なので、「商四」で尚志会と名づけられました。尚志会から数回、日帰りの小旅行をやつたり、長男の重雄さん、次男の常夫さんも御一緒に山崎の渡しに行つたり、水泳に行つたりしました。また、山脇毅先生のお宅に伺つたり、芦屋の岡田真氏の蔵書を見学したり、大橋清秀氏も御一緒に天理の図書館に行つたりしました。また尚志会では、先生が、松尾聰博士の『古典解釈のための国文法入門』や山岸徳平氏の『日記文学』のかけろふの日記の冒頭文の解釈のしかたについて、解説してくださいました。（山岸

徳平氏に先生が初めて逢われたとき、緊張して体がふるえたともらしておられました。

先生がそのころ、『前田家本枕冊子新註』や『枕冊子研究』を矢継早に出されましたが、わたくしどもは、ほとんどお手伝いをしておりません。

### 『校本枕冊子』のこと

昭和二十八年十一月二十日『校本枕冊子上巻』が発行されました。同年の夏休みには先生と岡本博文氏、柿谷雄三氏、菊川春子氏ら三名は、宇治市木幡の石川廣氏の一室で、校本の上巻のお手伝いをされました。昭和二十九年三月から、下巻の編集室として、中京区錦小路通大宮西入の休務寺の一室を借りて、編集にあたっておられました。わたくしも岡本、柿谷、菊川氏らと諸本の読み合わせに加わらせていただきました。夏休みはほとんど読み合わせで、すぎでしまいました。読み合わせは意味を考えずに、濁音は読まないで機械的に一人が原本などを読み、一人がそれを聞きながら先生の原稿と同じかどうかを検討してゆくのです。たとえば読み手は、「猶」は「ナオ、カンジ」と読み、「なを」は「ナウォ」と読みました。当時の先生は充実しておられ、わたくしどもも先生の学問に対するきびしさを痛感いたしました。先生は校本の礎稿をつくられながら、わたくしども二つのグループから同時の質問にもポンポンと機関銃のように返答されるというおしごとぶりでした。

昭和三十年三月十六日、休務寺は火災にありました。校本の「下巻末」に（昭和三十一年二月十一日）

「資料の大半と原稿とをうしなひました。吉田氏の秘蔵しておられた富岡本の下巻、伊達本の上巻をはじめ、池田博士、岸上慎二氏らから拝借してゐた影寫本なども焼いてしまったのです。わたくしが校合してゐたノートや本も焼けました。第二次礎稿のすべても、校正刷も、マイクロ、フィルムも焼けました。すでに印刷所へわたせる

ようになってゐた原稿も百數十ページ分焼けてしまひました。」

と記しておられます。もし、火災がなかつたら、下巻も順調に発行されたでしょうし、宇多野療養所入院もなかつたでしょうし、多量の睡眠剤など服用の薬害もなかつたかもしれませんし、能因本・三巻本の全注釈も堺本の注釈も完成しておられたかもしれません。

『校本枕冊子』については、楠道隆氏の「書評、田中重太郎氏編著『校本枕冊子』」（『文学』昭和三十三年二月号）の一部を転載させていただきます。

「……しかも客観的に言つて、学歴の上からも経済的にも、肉体的にもわたしよりは不利である立場の田中氏がやったのだからわたしの驚嘆は大きい。校本をつくる事がどんなに困難な事かは校本万葉集以来よく言われ、認知している事だが、特に枕草子の場合は異本が多く系統が複雑であるだけに困難度は大きい。現在伝来の知られているあらゆる本を網羅しなければならぬが、私蔵され、秘蔵されている古写本を見せてもらうのにはどれだけの手数と礼儀とを必要とするか。知る者はわかりすぎ、知らない人には想像もできないものがある。また多くの学者の協力が必要であるが、それがどれほど困難な事か。田中氏はしきりに多くの学者の協力を感謝しておられるが。それまでにどれほど田中氏が努力された事か、人はそうだれにでも笑顔を見せるものではない。見せられるものでもないのである。だがすべての人に笑顔向けられなくてはこの仕事はできないのである。学問のためとあれば、校本作製のためとあれば、必要な事のすべてをやりとげた氏に驚嘆するのはこの事である。わたしは氏の出版をたしかに援助したが、すぐに氏はわたしから完全に独立できたにもかかわらず、その後十数年にわたつて、氏は執筆した論文、出版した本のすべてをわたしに寄贈して下さっている。できる事ではない。こうした誠意があればこそ氏にすべての人は協力したと言える。」

と記しておられます。

先生は『校本枕冊子』（付巻）で、『校本枕冊子』の生みの親は池田龜鑑博士と吉田幸一博士であると記しておられますが、先生の先学に恩義を受けたことに對する尊敬と感謝の念の深いことを、わたくしどもは、學問を通して、人間の道として学びました。

昭和三十六年の夏休みに先生と鈴木弘道氏、大橋清秀氏らとわたくしども三名の六名で、四国の清少納言遺跡を訪ねたことがありました。徳島の富永勝氏らとも合流して、撫養の清少納言の尼塚遺蹟に行きました。金比羅宮への階段を最初に登られたのは、あの病身の先生でした。

『雑和集』の輪読会も開かれました。メンバーは前記の六名と森本茂氏、蔭木英雄氏との八名でした。

#### 宇多野療養所入院前後の先生

昭和三十一年十一月二十三日だったでしょう。床に臥しておられた先生の側に室山源三郎氏（先生の実弟）、菊川春子氏、服部美保子氏（後、先生の奥様）、岡本博文氏、柿谷雄三氏、わたくしらが集まり、まるでお葬式でも出すような沈んだ雰囲気の中で、入院の準備や校本の原稿の整理などに取りかかっていました。十一月二十六日に国立宇多野療養所に入院なさいました。

奥様の文字さまを亡くされ、養母のふじ様（先生の実父の妹）、美智子さん、重夫さん、常夫さんの四人をお家に遺しての入院で、さぞ御心配であつたらうと存じ上げます。このころお手伝いに来ておられた故辻しづ様は献身的にお世話なさっておられました。先生のお母様（養母）は「わたくしが代つてやれるものなら、代つてやりたい。」と悲しんでおられました。先生は入院されたある日、「どんな不幸なことになつても、他人をうらやましがつてはいけません。他人の幸せをわたくしはすなおによるこんであげる。」と、わたくしどもを諭すようにおっしゃいました。先生の入つておら

れる病棟は重症患者のいるところで、後日先生と北村さんという方を除いて全員亡くされました。先生は北村さんが亡くなられるまで親しくしておられました。一時はあやぶまれていた先生が元氣になられたのを見て、不死鳥のようにわたくしどもは感じました。

### 先生と枕冊子

先生は「枕」という文字を見ると緊張するとおっしゃられました。終戦直後京都駅付近に売っていたカストリ雑誌からも「枕」と書いてあるものは内容と関係なく、買って来たとおっしゃいました。

先生は前のお宅の中保町から転宅なさるとき、候補地を鳥戸野陵付近から物色されました。それがうまくゆかなかつたので、一条天皇陵の近くの龍安寺御陵ノ下町まちになさいました。

鳥戸野陵（定子皇后陵）にはわたくしどもも先生と御一緒にたびたびおまいりしましたが、先生はお一人でも最晩年に至るまで、つづけられました。「雪」の鳥戸野陵に詣でられ、感激したと写真を撮って来られたりなさいました。

藤本一恵先生のお宅が鳥戸野陵の近くにあるのを幸せな方だとおっしゃいました。

わたくしが現在の所に転宅したとき、「近くが曙あけぼの町です。」と申しましたら、「それは惜しかったね。」とおっしゃいました。

先生宅の飼犬はもちろん「翁丸おきなまる」でした。

京都の上七軒の「老松」というお菓子屋さんから「枕草子」というお菓子が販売され、その包み箱に春は曙の段が印刷されていました。先生は早速購入され、わたくしどもも頂戴いたしました。

京都の泉涌寺―鳥戸野陵の南にある―に清少納言の歌碑が立てられたとき、よろこばれて、「もし、清少納言の記念

館ができるようなことがあつたら、わたしの枕草子関係の蔵書は全部寄贈してもよい。」とおっしゃいました。

先生の枕草子のお話で、「春はあけぼの」の段以外で、最もよく話されたのは「ありがたきもの」の段ではなかったかと思えます。晩年京都府高等学校（公立・私立とも）の研究会で、この段中心に二時間近く、例のユーモアを交えて話されたことがあります。「毛のよく抜くる銀の毛抜」のところ、外観だけで、人物を評価しては危険だと清少納言は千年近く前にわれわれに警告してくれているのです。」とおっしゃいました。

先生は『校本枕冊子』に採用された底本をくつがえすような本文は今後はもう発見されないだろう」とおっしゃいました。

先生は「枕」の解釈で、「そう多くオリジナルが出せるものではない。それよりも先学の注釈を学びなさい。」とおっしゃいました。先生の中保町のお宅で、ぼろぼろになった金子元臣氏の『枕草子評釈』を見たことがあります。

先生の研究室に武藤元信書入「紫式部日記講義」（長田致孝著）を帙に入れ、たいせつに保存しておられるのを見て、はっとさせられました。たとい、髻骸に接しておられなくとも、先学を敬慕しておられた先生のお心にあらためて教えられました。

### 先生の聴覚・嗅覚

先生の計算力がすばらしいことは御存知の方も多いと思いますが、先生の聴覚・嗅覚もわたくしども凡人では及びもつかないことがあります。昭和二十九年の夏、休務寺で、先生は蚊がやかましいので蚊取線香をつけてほしいとよくおっしゃいました。わたくしには、どこに蚊が鳴いているのかわかりませんでしたのに。ほんとうに「大蔵卿」みたいな方だと思いました。昭和三十一年十一月宇多野療養所に入院される直前、先生はお宅の二階で病床に

臥しておられました。階下の庭で炭をおこしたり、たばこを吸われたりされると、すぐ止めるようにいわれました。そこへ吉田幸一先生がお見えになり、先生のおそばで、たばこを吸われると、「吉田先生はこの火の気のない部屋をあたためてくださいました。」とおっしゃられたのには、びっくりしました。宇多野の療養所の先生の病室に入ったとたんに、わたくしにたばこの臭いがついているので、部屋から出て行くようにおっしゃったことがありました。オーパーを職員室に吊してあったのが原因でした。先生は御自分の嗅覚にもてあましておられることがありました。

### 先生の才能

先生の才能は凡人には、ただおどろくばかりでした。療養所で、すこしお元氣になられると、ラジオをかうて来るようにおっしゃり、しばらくすると、「一台では時間がもつたない。もう一台買って来てください。」とおっしゃいました。両方の耳にイヤホンをあてておられました。（後日奥様からお聞きしたのですが、この時のラジオをたいせつにしまっておられたそうです。）

先生は文検（国語）の受験準備は朝日新聞社への通勤の省線（JR線）の中で、すませたとおっしゃいました。

先生はお元氣なとき、はがきの表と裏とを一枚につき、一分以内に書けるかどうか、時間を計ってほしいといわれ、数枚のはがきをそれぞれ一分以内に書きあげられました。そのときの速さは、なにか機械から文字が作り出されているという感じがしました。

先生の最晩年のころ、「臨床心理学の河合隼雄先生は、依頼された原稿で、原稿用紙の行数まで過不足なく書かれるそうです。」と申しましたら、「偉いねえ。わたしはリハーサルなしに時間内に話をしたり、下書きなしに原稿は書けるが、河合先生には及びません。」と、おっしゃいました。お元氣なときでしたら、こんな話にはもつと興味を示され

るのに。

先生は即戦即決がお好きでした。駿台予備学校京都校で、京大入試問題の解説や駿台予備校の東京校から送られてくる問題を――桑原岩男先生のお作りになった難問――「下読みする時間がなかったので。」とおっしゃいながら、すらすらと解いてゆかれる頭脳には、何人も舌を巻かずにはいられないだろうと思いました。

### 先生のお人柄

先生は『校本枕冊子総索引』のしごとがはかどらないとき、「わたしは学問の進歩を阻害している。他の人がせつかく、枕の索引をつくろうと思っているのに、あの人がやっているから止めようと思っている人もあるかもしれない。」とおっしゃいました。そんな先生ですので、松村博司博士監修の『枕冊子総索引』が発刊されたときは、よろこんでおられました。

「先生のお人柄を一言で申しますなら、「思いやりの深い方」だといえると思います。先生の教え子の中尾卓爾氏は一言でいうなら、「洒脱な方」といつておられました。

先生は長男の重雄さんが京都大学の薬学部に進まれ、漢方の研究をされ、鍼灸の分野に関心をもたれたとき、「鍼灸を研究するのはいいことだが、それで生計を立ててはいけない。身体に障害のある人の領域を侵してはいけません。」とおっしゃいました。

### 先生と相愛学園

先生は宇多野の療養所に入院しておられたとき、病室の入口に今小路覚瑞（元相愛学園長）先生からのお手紙を飾

つておられました。「退院されるまで相愛では、いつまでもお待ちしています。」というような内容でした。

先生の手帳の春秋の日祝日は相愛の卒業生の結婚披露宴のため、ぎっしり詰まっています。「先生の休日は相愛の卒業生のためにあるみたいですね。」と申しますと、にっこりされて、「私学はアフターサービスがたいせつやからね。出席回数は三百回を超えたよ。」とおっしゃいました。御馳走も召しあがられず、一日に二か所でも出席なさいました。宴席での先生お得意のテーブルスピーチは「大阪一授業料の高い学校に八年間（中・高・短大の場合）も来ていただきまして、どうもありがとうございます。」から始まるのだそうです。

先生は他の大学からの招聘は感謝はされながら、お断わりになりました。

先生が短期大学の学部長になられたころ、体調をくずしておられました。学校の事情を知らないわたくしは止められたらと申し上げたところ、今はどうしても止められないと悲痛な表情をしておられました。そのころ、森川晃卿先生が学長に就任されました。先生は子どものように喜ばれ、「信じられないことが起った。」とか、「森川学長はわたしの肩の荷を二十分の一にしてください。いや、それ以下にしてください。」とか、「学長はわたしの命の恩人だ。」とか、「学長は相愛という池に浮かぶ軍艦のようだ。」というようなことに譬えられました。おふたりは七年間、文字どおり肝胆相照らす仲でおられたと拝察いたしております。

昭和六十二年六月三十日に相愛大学人文学部で先生の追悼法要が行われました。そのとき、森川学長は追悼のことばの中で、朝日の古典全書の『枕冊子』を昭和二十二年に買い求められた思い出や、今小路前学長と田中先生との約束を果たすために大学の人文学部をつくったのだと話されました。

相愛女子短期大学国文学科同窓会発行の「ちぬの海」（創刊号昭和六十一年十一月二十五日）の巻頭言で「わたくしの教員生活は昭和六十二年の春で満五十年になるが、その大半は相愛学園でのものである。学生の人がらもよく、先

生もりっぱで、病弱なわたしがここまで生きられたのは、相愛のおかげである。わたくしの『いのち』が相愛女子短期大学国文科によって保たれたとしみじみ思い、感謝している。」と書かれたのは、最晩年の先生の述懐であったと思っております。

五月十日にわたくしの近況について、三件ほど御報告申し上げたいことがあって、先生宅に妻と伺いました。先生はすぐ和服で玄関に来てくださり、一応接間は本の山で入れません。一二十分間くらいでしようか、わたくしの家族のこと、御自分の家族のこと、「平安文学研究」のこと、相愛のことなどを一方的に早口で話されました。その痛ましいお姿に胸がつかまって、「先生はやくお休みになつて下さい。」と申すのがせい一ぱいでした。

先生の偉大さは普通人の数倍の障害を肩に背負いながら、枕草子の研究、『平安文学研究』、相愛のこと、予備校のことなどについて、初心を貫かれたことだと思えます。

「当相敬愛」(……当に相ひ敬愛し、……すべし)の無量寿経の精神は先生には自然に備わっておられました。

先生は「椿雨」と号された塩田良平博士が椿の花の落ちるようになつて亡くなられたのを御自分もそうありたいと願っておられました。そのような亡くなりかたでした。

先生は五月十六日にお浄土にお還りになりました。先生の法名は「春曙院釈重誓」(「重誓」は、正信念佛偈の中の重誓名声聞十方や重誓偈からと先生のお名前から)です。先生の旦那寺は安居院の西法寺で、お墓は西法寺の合同墓です。

あらためて先生を追慕しながら、哀悼の意を表します。

合掌